

## トマスにおける個別化原理としての質料 概念と形相唯一説の問題

牛 田 徳 子

アリストテレスが実体をトデ・ティ（これなるなにか）として以来、実体はすくなくとも質料的物に関するかぎり個別者であるという考えが定着した。この事実は質料形相論に対して、種と個別に関する一つの問題性を提供する。すなわち、形相と質料の合成によって、種的本性が完成されると同時に、この本性を共有する多くの個別者がどうして生じるかという問題である。アリストテレス以来、個別者とはそれぞれが所属する種においては一つでありながら、数においては多数、換言すれば個別者の各々は種においては他と共通、同じであるが、数においてのみ他から区別され、それ自体一つであるものと規定されている。これに対してわれわれは、形相と質料の合成でもって、同じ類に所属しながら他の種と区別される種の一性を理解するのは容易であるが、種の生成と同時に同じ種のなかからの、数においてだけ異なる個別者の生成を理解するのは困難である。なぜなら実体の規定原理である形相は、種を類から区別する種的差別性を決定はしても、各個別者が他の個別者から区別されるその数的差別性をも決定するとは考えられないからである。すくなくともアリストテレスを継承するトマスにおいてこのことは質料形相論上の一問題となるのに充分である。トマスがアリストテレスにしたがって<sup>(1)</sup>、実体生成の際の個別化は質料に由来すると考えたのは当然の成り行きであったろう。他方、彼は実体合成の方式が唯一の実体形相と第一質料によるそれであるという彼独自の形相唯一説をあきらかにしている。この教説がアリストテレスに抵触するとは一般に考えられていないにもかかわらず、それはアリストテレスのどのテキストにも見出されない新しい考えである。むしろ筆者によればそれは、実

体形相は近接質料をその固有の質料とするというアリストテレスの質料形相論と異なるばかりか、形而上学、自然学上のいくつかの問題点において鋭く対立する結論を導くものである。本論では個別化の問題がトマスの形相唯一説に遭遇すればどのような理論的困難性に陥るか、他方トマスがあらたに発掘した個別化原理の諸概念がアリストテレスの質料形相論にとってどのような建設的意義をもちうるか考えてゆきたいと思う。それは同時に本論がトマスの形相唯一説に対する質料形相論的批判の一つになることをも意味している。

トマスにおける個別化の問題提起自体をアリストテレスの前提なしに考えることが不可能なのは明白である。われわれは問題の概念と背景を明確にするためにまず、アリストテレスにおいて個別者の数的一性がどう考えられていたかをあきらかにしてみたいと思う。

個別者がそれによって一つといわれるところの数とは何か。アリストテレスは数を二様の意味に解する。すなわち一つはものがそれでもって数えあげられるところの数、つまり一、二、三という抽象数であり、他の一つは馬の一頭、二頭のように数えあげられる数、つまりものの数量である<sup>(2)</sup>。個別者の数とはもちろん後の場合の数のことである。ところで数は量に属するが、数える数と数えられる数は当然異なった種類の数である。抽象数は絶対的な不連続量として理解されるが、数えられる数はかならずしも不連続量として理解されないこともできる。たとえばそれはあらゆる方向に連続的でない点でもよいし、一方向にだけ連続的な線でもよいし、二方向に連続的な面でもよいし、三方向、つまりあらゆる方向に連続的な立体でもよいわけである<sup>(3)</sup>。ここで問題になる個別者は生命、非生命を問わず物体<sup>ソーマ</sup>であるから、当然三方向に連続的な立体量をもつ。これを三次元的延長体とよぶことができる。三次元的延長体がたまたまなんらかの仕方で非連続化したとき、それは一個、二個と数えあげられることができる。これが個

別数の基本的性格である。

ところで延長体が非連続化するのはどういう場合であろうか。まず考えられるのは分割である。アリストテレスが連続は無限に可分割であると述べているように、物体は延長量として考えられるかぎり任意に分割されることができる。しかし物体が現実に無限の部分に分割されてあることは不可能であるから、実際には或る連続量をもった有限数の部分に分割され、それぞれがこれ・あれと指示されるような個性をもつことになる。また延長体はその部分が集合して形成されることもできる。この場合、穀粒の堆積とか、寄木細工の寄せ集めのようにではなくて、各部分の限界が接触して一つになることによって全体が一個の連続体になるのが必要であるのはいうまでもない。このように延長量としての物体は容易に分割乃至集合を受入れ、自然的合成 *σύμφυσις* や強制的分割すらも可能にする<sup>(6)</sup>。

しかし以上は物体が容易にそして任意に非連続化しうることを示してはいるが、それがかならずどこかで非連続化しなければならないことは一向にあきらかにしていない。個別性は数的、非連続的に多くでありうるという性格以上のものでなければならない。すなわち個別者の数的一性とは、もはやこれ以上分割も集合も許容しない一定、不可分の単位量をもつことによって物体がそれぞれ一つであるということである。このことが物体をたんにその連続性において考えるかぎりは導出されることがないのは以上であきらかであろう。したがって物体の個別的一性を決定する要因が連続性の他にどこかで求められなくてはならない。ただしこの要因とは物体が自然的に個別的一であることの自然的要因を指し、自然的合生や人為的強制による場合は除外されなければならないことはいうまでもない<sup>(7)</sup>。

アリストテレスは物体が一つであることの規準として、その自然的運動が一つであること、それが存続する時間が一つであること、それが占める場所、すなわち空間が一つであることの三つを挙げている。たしかに物体は不可分な時間、すなわち「今」と、不可分な空間、すなわち「ここ」の

状況的なコンテキストにおいて初めて「これ・あれ」と指示され、区別される個性として知覚される<sup>(9)</sup>。しかしながら時間と空間が物体の個別的一性の要因であることは不可能だといわねばならない。なぜならアリストテレスによれば「運動の数」である時間と「物体を包む」空間は運動乃至物体に付随する付带的連続量であって、運動、物体が非連続にならなければ一つにならないからである<sup>(10)</sup>。それでは運動が一つであることによって物体が一つといわれるであろうか。たとえば上昇運動が火に、下降運動が土に対応するというように、単純運動が単純物体に対応する場合は運動の一性は物体の一性の決定的な基準となるであろう。しかし生命物体をとって見た場合、このことは困難であるといわねばならない。なぜなら一個の生体には多様な運動が各器官において自然的に生じるから、もし運動によって物体の一性が決定されるなら生体が多くの部分に分割されてしまうだろうからである。それゆえ物体の個別量が成立するためには全体 τὸ πᾶν、完結 τὸ τέλειον の概念を導入することが必要である。すなわち延長体が不可分な一つのものとなるのはそれが全体的、完結的である場合にかぎられており、それが全体的、完結的になるのは諸部分の任意な集合でも、部分の任意な切り取りでもなく、ただ一定の比例、規格、すなわち形相にしたがって集合乃至切り取りがなされた場合だけである<sup>(11)</sup>。それは形相がまさにすぐれた意味で運動の原理、すなわち自然<sup>ビュッス</sup>である限りにおいて自然的運動が物体の個別的一性の要因であることを意味する。このように物体が不可分な一としての個別量をそなえるためには、それがまず可集合、可分割な連続であることが前提されていなければならないことは当然である。しかし集合、分割いずれにせよ部分として考えられているかぎり物体は質料的であって、いまだ全体の、実体の可能態でしかない<sup>(12)</sup>。そこではまだ個別量の一定性が確立、実現していないからである。それゆえ或る物体が自然的に個別的一者であるためには、その可分割な質料的延長性の基礎の上にその物体に固有な形相が量的一定性を実現しているのでなければならない。言

い換えるならば、本性の不定性の原理である質料が延長量の不定性を結果するのに対して、本性の一定性の原理である形相が延長量の一定性を結果しているともいえよう。丁度形相のもたらす本性の現実態が、質料のもつ本性の可能態によって制約、制限され、いわば本性的不定性のなかでの一定性として具有化するのとパラレルである。

以上がアリストテレスにおける個別的一性の意味であると考えられるが、それでは形相と質料の実体合成の際になぜこのような個別者が多数生じるか、といういわゆる個別化の問題が問われる。すでにあきらかなように、個別者の生成はたんなる延長体の任意な分割、集合による量的変化ではなく、形相・質料の本性合成にふかく根差すものでなければならぬからである。<sup>(13)</sup>問題はこのような個別者生成が質料形相論によりいかにして妥当に説明されるかということである。

トマスが、個別化が生じるのは質料の分割に起因すると考えているのはアリストテレス的発想であるといえる。この個物、あの個物が生成するのは、形相を受けとるべき質料自体が分割されてすでにこの質料、あの質料となっており、このような質料が形相を受けとる以上、形相もまた「受けとるものの仕方にしたがって」個別的に受けとられるからである。しかし質料そのものを考えるかぎり、それは不定であるから自らでもっていかなる自己の区別も生ぜしめるとは考えられぬ<sup>(14)</sup>。質料自体が分割的であり、その結果これ・あれと指示しうる質料であると考えれば、質料そのものの個別化が問われることになり、問題はふたたび振り出しに戻ることになる。それゆえ質料が個別化の原理となるのはただ、質料が有形性 *corporeitas* の形相をふくみ、三次元 *tres dimensiones* を所有し、その結果分割されてあるかぎりにおいてである。つまり有形性以上の形相をこの形相、あの形相というかたちで受けとるのは、質料がすでに有形化され、量化され、分割されて、或る仕方で三次元の基体となっているこの質料、あの質料

であるからである。トマスはこのような質料を「指示された質料 *materia signata*」とよぶ。質料が個別化の原理であるのは質料そのものではなく、三次元量の基礎にあり、それによって区別されうる「指示された質料」であるかぎりにおいてである<sup>(15)</sup>とされる。かくて形相・質料合成から個別者が生成するためには、一方の生成因である質料がすくなくとも最少限の、いわば最低位の形相をふくむ「物体」でなければならない。このような「物体」がそれ自体実在しうるかどうかはわからないが<sup>(16)</sup>、すくなくとも爾余の形相と合成し、そこから必然的に個別者が生成されてくるような実体合成において質料はそのようなものでなければならないのである。

ローラン・ゴスランはトマスの著作の年代を確定することによって、彼の個別化原理としての質料概念が変化を辿っているのを分析した<sup>(17)</sup>。以下ローラン・ゴスランの考察にもとづいてトマスの個別化理論の変遷を辿ってみる。

トマスが最初に考えた「指示された質料」とは、大きさ、形、位置などにおいてすでに一定の限界をもつ三次元量の基体ということである。この三次元量を「限定された三次元 *dimensiones determinatae*」と彼はよぶ。しかし彼はのちにアヴェロエスの影響をうけてこれを修正し、「指示された質料」を、「限定された三次元」に先行し、いまだ限界不定の量<sup>(18)</sup>そのものともいふべき「限定されざる三次元 *dimensiones interminatae*」の基体にとどまるとする。なぜなら三次元量の限界は同一個体においてその存続中も変化するものだからである。もしこれを個別化の原理とすれば、個体が存続するかぎり認められるべきその数的同一性は保証されなくなるであろう<sup>(18)</sup>。「限定された三次元」はすでに完成した個体基体の上にあられる偶性にすぎない。この個体そのものの個性を結果するのは特殊な限界の背後に不定な量として質料のうちに先在する「限定されざる三次元」でなければならない。かくして有形性の「限定されざる三次元」が質料を分割し、個別化することによって「指示された質料」にし、この「指示された

質料」が形相を個別化し、数的に多数ならしめることによって個別化の原理といわれる。<sup>(19)</sup>

ローラン・ゴスランによれば、トマスはしかし実体形相唯一説と呼応して「限定されざる三次元」の概念をも破棄することになる。それではトマスにこのような個別化概念の変更を余儀なくさせた形相唯一説とはいかなるものであるか。形相唯一説はトマスの質料形相論に初めから潜在しているが、靈魂の問題を扱うときに明確な形で打ち出された教説である。彼によれば、或る実体においてその質料とその形相との間にいかなる他の形相も介在してはならない。なぜならもし介在すれば一つの実体が多く形の相をふくむことになり、実体の端的な一者性は保証されなくなるからである。またもし最初の形相が実体を実体たらしめているとすれば後続的な形相は偶性形相にすぎなくなるであろう。たとえば人間は実体的にはたんなる物体でしかなく、人間であることは彼にとって偶有であるにすぎなくなるであろう。それゆえどんな実体もそれは最終的形相と、いかなる形相もふくまない純粹可能態の第一質料とで合成したものであり、物体以上の実体において論理的、認識的には先行している一切の形相の段階はすべて最終の、ただ一つの形相にふくまれていなければならない。<sup>(20)</sup>

形相唯一説の出現が今までわれわれのみてきた個別化理論に牴触をきたすことはあきらかであろう。まず形相・質料による実体合成の際、質料のうち有形性の形相の先在を認めることは不合理になるであろう。なぜならそれを認めれば形相多数説に陥る可能性がでてくるわけで、そのために有形性の形相は物体以上の実体においてはすべて最終の実体形相にふくめられてしまわなければならないからである。<sup>(21)</sup> つぎにいかなる三次元量も質料のうち認めることが不可能であることは以上から明白であろう。三次元量は偶性であるから、かならずその原因である有形性の形相を想定しなければならないからである。いかなる偶性も実体形相に先行するものではないから、もし物体以上の実体においてその三次元量があらかじめ考えら

れるならば、それは論理的、認識的先行性にすぎない。<sup>(22)</sup>以上のように有形性も、三次元量も、したがって質料の「指示性」もただ論理的先行性を認められるにすぎないとすれば、一体質料自体に帰せられるべき個別化の原理とはいかなる性格をもつものであろうか。

トマスは個別性の特徴として、もはや他のもののうちでないことと、多くのもののうちでないことの二つをわける。第一に関して非質料的実体の形相は離存、自存的であるから必然的に他のもののうちになく、それ自体で個別的である。これに対して質料的形相は他のもの、すなわち質料的基体のうちに受けとられる。ところでこの種の形相を受けとる第一質料は存在の秩序の最下位にあるゆえに形相をその完全性において受けとることができず、自らのもっとも劣弱な存在にしたがった形で形相を特殊化して受けとる。このようにして受けとられた形相はしかし第一の意味において個別化される。なぜなら受けとる質料が他のもののうちに存しない基体的性格のものであるゆえに、形相はこの基体のうちにあることによってもはや他のもののうちに存することはないからである。かくて第一の意味で質料が個別化の原理である。つぎにこのようにして受けとられた形相は偶性である三次元量によって多くのもののうちでなくただ一つのもののうちにあることを保証される。なぜなら三次元量がもはや他に<sup>インディヴィススム</sup>分割されず、すでに<sup>ディヴィススム</sup>分割されてある不可分な量を決定するからである。かくて三次元量が第二<sup>(23)</sup>の意味で個別化の原理である。

以上、ローラン・ゴスランの解釈にしたがってトマスの論述をみてきたわけだが、われわれはここでローラン・ゴスランの解釈をその細部にわたって、トマスの文献の歴史的研究として妥当するかどうかを検討する意図<sup>(24)</sup>はない。彼の解釈がわれわれの興味をひくのは、彼が個別化原理としての質料概念の変遷を形相唯一説の展開と関連させたこと<sup>(25)</sup>である。のちに述べるように形相唯一説では質料の役割がきわめて消極的なものにされている。それと呼応するかのように、個別化原理としての質料が「限定された三次



元」の基体から「限定されざる三次元」の基体へと後退し、さらに「指示された質料」から第一質料へと後退することは、この問題が形相唯一説と理論的関連をもっていることをわれわれに気付かせる。すくなくともトマスがこの問題に関して揺れ動き、首尾一貫した主張を打ち出しえないかのように見えるのは形相唯一説がそれを阻んだからであると考えすることはあながち的を外れたことではないであろう。

実体合成において、種によっては同一であるが、数においてだけ異なる個別者が生成することを説明するのに、もしアリストテレスにしたがって形相は普遍的本性を実現するにとどまるとするならば、原因はただ質料の側に求める他はないであろう。そして形相を受けとるべき質料が分割されてあるからこそ形相的本性もまた個々の基体によって受けとられるかぎり個別化されざるをえないと説明するのは合理的な仕方である。個別化は受容基体による受容されるものの制約、規制である。「限定された三次元」の基体である「指示された質料」概念はもっともこのことに合致する。しかしここに問題がある。質料が量化され、三次元の基体になるとすれば、実体に後行すべき偶性上の量を実体の原理である質料のうちに認める循環論法に陥ることになる。すくなくともわれわれがさきにもたような性質の形相唯一説の傾向をトマスが持するかぎりこのことはどうしても避けられなければならない。この視点に立つかぎり「限定されざる三次元」は苦肉の、しかし中途半端な策であろう。たとえ完成された物体がもつような量的限界を質料から剥奪し、ただ不定の量そのものという不明確な属性を質料に与えるにとどめても循環を逃れることはできない。さらに非限定の三次元性ははたして質料を分割して、これ・あれと指示可能なものにするだろうか。すでにみたように指示性は物体の延長的不可分性、すなわち量的限定性に依存するものだからである。「限定されざる三次元」の基体としての質料が個別化原理に相応しなくなったのは、以上の議論の枠内に規制されているかぎり、当然の運命であったといえよう。トマスが「限定され

ざる三次元」の概念を破棄したのは形相唯一性の明確な意識とまさに一致しているように思われる。

最後にトマスが試みた案は、基体による他からの区別と、量による他からの区別をわけることによって、偶性の次元を実体の次元に先行させる循環を避けることにあったと考えられる。しかしこの解決策も自体いくつかの難点をふくんでいるといわざるをえないであろう。質料基体が形相を受けとることによってそれに与える「もはや他のもののうちにない」性格とは、実体そのものの一性、自存性を意味すること以外にはなく、そこから個別性が意味するところの実体の数量的一性が導出されるわけではない。また存在の最下位にある第一質料が形相を特殊な仕方で受容するという制約性は、それが種的、質的制約でありこそすれ、どうして個別性が意味するところの数量的制約にとどまりうるだろうか。たとえば数において異なる人間性は種において共通普遍的な人間性より劣ったものでありうるだろうか。さらに偶性の次元における三次元量はそれ自体としては可分割であるのみで、形相の規定なくしてはけっして不可分の個別量を結果しえないことはすでにアリストテレスのコンテキストにおいてみた通りである。個別化の原理を一方第一質料に、他方量的偶性に区別したことは、それぞれの概念のふくむ説得性の弱さをあらわすばかりでなく、質料と量という個別化に不可欠な概念を分裂させることによって個別性の事実から遠ざかるものといわねばならないであろう。

トマスがアヴィセブロン<sup>1</sup>の形相多数説に対して実体形相は唯一つでなければならぬと反論するその論拠は正当である。なぜならば実体がそもそも存在、一、不可分であるのは唯一つの形相がそれを保証するからである。しかしトマスが構想した第一質料と形相の合成方式はあきらかにアリストテレスの質料形相論と相異なる。なぜならアリストテレスではつねに近接質料と形相の合成が説かれているからである。それでは後者の合成方式が形相の唯一つであることの原則に反するであろうか。たしかに近接質料は

下位の形相をすでにふくんでいる。しかしながら近接質料を実体形相の基体とすることは、ただ以下のように考えればけっして形相多数説に陥ることはない。質料は実体形相に対して可能態にある。もし実体形相が近接質料に対して種の実現化の現実態であるならば、質料のなかの下位の諸形相——すなわち類的規定の諸原理——はこの実体形相に対しては質料とともに可能態にあり、ただそれによってのみ種の現実態に導かれる。たしかに下位の形相は類においては現実態である。しかし実体である種においてはそれが可能態でしかなく、実体形相の唯一つの現実態をいささかも侵害する恐れはないのである。そのゆえにこそ実体の定義を構成する類は質料に基づき、種差は形相に基づくと考えられているのである。これに対してトマスがたてた形相唯一説には、形相に対する或る先入観念が支配していると考えられる。すなわちトマスによれば、丁度より多くの働きをなす能力がよりすぐれ、より少ない働きをなす能力がより劣っているように、多くの低次の形相がなしとげる完成を一挙にもたらす形相がより高く、よりすぐれ、すぐれた形相に及ばない完成しかもたらさない形相はより低く、より劣っているのである。このように質料と一切かかわりなく、形相相互にのみ優劣、上下の階層があり、類種の段階はただこのような形相の秩序にしたがってア・プリオリに決定されるという新プラトン主義的形相観をトマスは導入する。<sup>(28)</sup>このような教説からは、より低い質料基体にはより低い形相が相応し、より高い質料基体にはより高い形相が要求されるという質料の積極的な役割を認める自然主義的なアリストテレスの質料形相論と一致しないいくつかの論点が導出されてくるのは当然であろう。<sup>(29)</sup>そしてその諸点の一つが個別化の原理としての質料の概念である。

それではわれわれは最後に、近接質料と形相の合成というアリストテレス的質料形相論にしたがって個別化の現象がいかにして説明されうるかの可能性を考えてみることにしよう。近接質料の概念は自然物体の形成を、

古典的な表現においてはであるが、発生的な経過において考察することを容易にさせる。

アリストテレスによれば、世界の有限な質料は四元素というもっとも単純な物体に実現する。彼は結合・分離の最小単位としてのアトモンを認めないから、四元素は種によって区別されるだけである。しかしそれらは相互への生成・滅亡という実体転化をたえず行なうことによって単純性質、上下運動、上下の場所を循環的に相互に交換しつつ連带的に一つの物質世界を構成している。元素は無形、無姿であるから、その大きさは全体によってしかきめられない。すなわち各元素は互いに包み包まれることによって、また元素界全体は天体に包み包まれることによってその場所と連続量の限界を決定されるだけである。他方それは無形、無姿の連続体である以上、任意に分割されるが、もはやこれ以上不可分であるような部分に達することはできない。したがって元来のどんな分割された部分も偶発の不定な結果であって、けっしてそれ自体一定の個別的連続量を生み出すことはないのである。つまり元素は物体のうちでもっとも質料的であるゆえにもっとも可分割性に富み、もっとも非形相的であるゆえにもっとも一定性のない延長体であると考えられる。以上から元素物体は全体として数上ただ一つ、個別数がただ一つの単一実体とする他ないであろう。

しかし元素の偶発的に分割された部分の或るものが相互に混ざりあって集合し、混合体を形成する。それは固体であるから有形に近いけれども、しかしそれが同質部分ともよばれているようにどんなに微少部分に分割していてもその混合状態は変わらないとされているから、その分割は元素と同様、任意・不定であらざるをえず、そこから一定量の個別的単位を取出すことは不可能である。しかしながら混合体の或るものは生命の基体となるのに適した素質をもつ。これが分割されて生物の有機的な最少部分を形成する。さらにこれらの異なった同質部分が集合して生物に固有な働きのための器官を形成し、さらに諸器官が統合して植物、動物なりの生命営為

に適した一箇の調和ある身体を形成する<sup>(34)</sup>。このように物質のなかから任意、不定に分割された部分がえらばれて複雑な過程を経て集合し、生命形成の段階で初めて有形で不可分な個体が出現してくると考えられる。さらにそこから人間の個体が実現するには、動物の或る種の個体群がえらばれてその個々の身体基体となることが必要であろう。

以上のように存在の諸段階を、下位の物体が上位の物体の近接質料となり、上位の物体がさらにより上位のものの近接質料となるという具合に連続的な発展段階としてとらえるならば、質料の個体形成に対する役割がおのずから理解されてくるであろう。延長量の分割・集合部分はかならずしも個別者を構成しない。それは四元素、混合体などの非生命的物体においてみられるように偶性的現象形態にとどまることもありうる。しかしそれは上位の実体生成に対しては基体の役割を演じ、形相受理の制約になる。質料的基体がすでにこの基体・あの基体に分割され、「指示された質料」になっているからこそ形相が個別的に受けとられるのである。しかし分割された質料基体の三次元量はそこから生成する上位の個別者の三次元量を規制、制約はするが、規定するにはいたらないという意味で不定にとどまる。これを「指示された質料」に内在する「限定されざる三次元」として理解することができるだろう。「限定された三次元」は実体形相の規格にしたがって実現する個別者の量的三次元である。たとえば人間の身体基体は或る種の動物の個体を想定させる。しかしその三次元量は動物のそれとまったく同一であるわけではない。人間の身体の大きさ、形、器官は人間に固有なそれらでしかなく、ただ質料的基体としての動物のそれらに制約されているだけである。人間の三次元量はただ人間形相の規格に支配され、そのもとで健全に機能するように実現するのである。トマスの個別化の原理としての「指示された質料」および三次元概念はこのような近接質料による実体合成において考えるとき整合的な意味をもつと考えられる。そしてそれはあきらかにトマスの形相唯一説に背理する。トマスの形相唯

一説が内在的な困難さをもつばかりでなく、個別化の問題についても重大な支障をきたすことは以上であきらかであろう。

すでに述べた通り物体の分割・集合部分はかならずしも個別者を構成しない。それはこれ・あれと指示されうる数量個になっていても、任意、不定に実現されるかぎりはいまだ一定、不可分の単位にならないからである。しかしさらに個別者のすべてがかならずしも実体ではないとおそらく主張すべきであろう。たとえば植物、動物の個体はたしかに個別者とはなっているが、それをただちに実体とみなすことには問題がある。なぜならそれらは個のレベルを越える種の次元でのみ実体的に有意味であるような法則に組みこまれ、それにしたがって機能する現象因子として説明される方がより合理的だからである。<sup>(35)</sup>これに反して人間においてはその個別者が実体であると主張すべきであろう。なぜなら人間形相のあらゆる種の本性、すなわち理性性はすべての個別の人間にことごとく実現しており、それぞれの人間のそなえる理性性はどの個別例をとってみても人間種を代表するのになんの不足もないからである。<sup>(36)</sup>人間の質料的基体がたとえ全体的動物種の現象的分割部分であるとしても、そこから人間の実体的個別者が生成するにはなんの妨げもない。それゆえ人間においてのみ、種においては共通であるが数においてのみ多である個別者が実在する実体なのであり、その種はたんなる抽象的普遍でしかないと主張すべきであろう。

トマスは人間の理性形相を、質料に全的に「没入」しない質料的形相であると規定することによって、人間存在の質料形相論的構造を解明することに成功した。<sup>(37)</sup>それは同時に、理性形相もまた質料による個別化をうけ、人間も下位の存在と同様に種においては同一であるがただ数においてのみ異なる個別者であることを立証するものであった。<sup>(38)</sup>このかぎり人間の個別者は典型的に実体——アリストテレスの第一実体——なのである。実体は形相を通じて導入される存在 *esse* によってこれのみが自存する存在 *ens subsistens per se* である。ところでもし人間以下の存在においてはその個

別者が偶性にすぎず、むしろその種が実体であるならば、個別者は実体と与えられたただ一つの自存性 *subsistentia* を他の個別者とともに共有し、それに参画、依存することによってのみ存在するにすぎないと考えられる他ないであろう。これに反して人間においてのみ、その個別者が実体であるならば、人間の個別者のそれぞれがその個別化された形相を通じて導入される個々の存在 *esse* を享受し、それぞれが個々の自存存在でなければならぬであろう。そして人間の質料的身体は動物種の現象部分からえらびとられたものであるが、それが個別の実体形相の受容基体であるかぎり、この形相とともに個別的な実体的自存性を享受していると考えなければならぬのである。

アリストテレスが「質料こそ形相を求めるものである」と述べているごとく、<sup>(39)</sup> 質料の可能性は、それが自然の要因であるかぎり、<sup>エンテレクテイア</sup> 現実態への積極的な参画性を認められなければならない。トマスの形相唯一説が唱える純粹可能態の第一質料がこのような質料の役割を果たすことは不可能である。質料が実体合成の各段階においてそれぞれの形相への近接可能態としてとらえられるかぎり、延長性、分割・集合性などすべての質料的属性はあらゆる意味における現実態への積極的参加の要因として振舞い、そのかぎり自然秩序構成の不可欠因子として扱いうることはあきらかであろう。

## 註

- (1) *Met.* Δ 6, 1016b 32 「数において一つであるものとはその質料が一つであるものことである。」 Z 8, 1034a 7 「カリアスとソクラテスはたがいに質料によって異なっている。というのは質料が異なるからである。しかし両者は種において同じである。というのは形相は不可分であるから。」
- (2) *Phys.* Δ 7, 219b 6; Δ 12, 220b 20-22.
- (3) *Met.* Δ 6, 1016b 24-.
- (4) *Phys.* Γ 7, 207b 16.
- (5) *Ibid.* E 3, 227a 10-17.
- (6) 自然的合生については *Met.* Δ 4, 1014b 22-26 参照。たとえば接木のような

場合である。強制的分割については *ibid.* Z 16, 1040b13 参照。

- (7) 自然的合生や強制は反自然的であり、その結果は<sup>ペーローシス</sup>変態にすぎない。*Met.* Z 16, 1040b 15 参照。
- (8) *Met.* I 1, 1052a 25. アリストテレスによれば一であることの原因は他にもあるが、ここでの一性とは連続の不可分性を意味する。それは質料において一つであることと同義である。しかしこのことはのちにあきらかになるように形相との関連なしには成立しない。
- (9) トマスは三次元量の不可分性を主として限定された空間、すなわち位置にもとづかせている (*In Boet. de Trin.*, Q. 4, a. 2, ad 3)。位置はとりわけ視覚によって判別されるもっとも明瞭な知覚的指標である。しかしアリストテレスによればそれはさらに限定された時間、すなわち今にも依存する。そして時間は内感によって知覚される (*Phys.* Δ 11, 219a 3〜)。
- (10) 拙論「アリストテレスの時間概念」(西洋古典研究 XXII, 1974) 58-60頁参照。
- (11) *Met.* Δ 6, 1016b 11-; Z 17, 1041b 11-; I 1, 1052a 22.
- (12) *Ibid.* Z 16, 1040b 5〜.
- (13) *Ibid.* N2, 1089b 36 「もし量と実体が異なるものであるならば、実体は何ものからであるか、またどうして多くあるか、その説明はなされていない。」
- (14) *In Boet. de Trin.* Q. 4, a. 2. “Unde forma fit haec per hoc quod recipitur in materia. Sed cum materia in se considerata sit indistincta, non potest esse quod formam in se receptam individuat nisi secundum quod est distinguibilis. Non enim forma individuat per hoc quod recipitur in materia nisi quatenus recipitur in hac materia vel illa distincta et determinata ad hic et nunc. Materia autem non est divisibilis nisi per quantitatem.”
- (15) *In I Sent.* dist. VIII, Q. 5, a. 2. “Sed ex quidditate substantiae materia non habet divisionem ss.”; *De ente et essentia.* c. 2. “Sed quia individuationis principium materia est, ss.”
- (16) アリストテレスによれば四元素以前の共通な物体というものはない。*De gen. et corr.* A 5, 320b 23 参照。
- (17) M.-D. Roland-Gosselin, *Le “de ente et essentia” de S. Thomas d’Aquin, Texte établi d’après les manuscrits parisiens, Introduction, Notes et Etudes historiques*, Paris, 1948, pp. 104-120.
- (18) しかし三次元の限界はゆるく考えることもできる。たとえば人間の身体は一生の間量の変化を蒙るし、人間相互の量の差異もある。しかしそれはつねに一定の限界以内にとどまる。Aristoteles, *De anima* B4, 416a. 16; Thomas, *In lib.*



*de anima* II, 4, l. VIII, n. 332 (ed. Pirotta, Turin, 1959) 参照。

- (19) *De ente et essentia* C. 2 “et dico materiam signatam quae sub determinatis dimensionibus consideratur”; *In II Sent.* dist. III, Q. 1, a. 4 “impossibile est in materia intelligere diversas partes, nisi praeintelligatur in materia quantitas dimensiva ad minus interminata, per quam dividatur, ut dicit Commentator in libro *De substantia orbis*”; *In Boet. de Trinit.* Q. 4, a. 2 “Dimensiones autem istae dupliciter possunt considerare ss.”; *ibid.* ad 3.
- (20) *Q. disp. de spirit. creat.* a. 3; *Q. disp. de anima* a. 9; *Summ. theol.* I, Q. 76, a. 7; *In lib. de anima* II, 1, l. I etc.
- (21) 事実トマスは初期にはその存在を認めたかにも見える有形性の形相を後になって否定するにいたる。 *Contra Gentiles* L. IV., c. 81 (4152) (ed. Pera, Turin, 1961) 参照。彼が初めから有形性の形相を認めていないと主張する論者も多い (I. Klinger, *Das Prinzip der Individuation bei Thomas von Aquin*, Würzburg, 1964, pp. 37-42 参照)。しかしこの主張はトマスのテキストに過度の整合性を与えようとする不自然な解釈のように思われる。
- (22) *Summ. theol.* I, Q. 76, a. 6, ad 2; *Q. de spirit. creat.* a. 3, ad 18.
- (23) *Summ. theol.* III, Q. 77, a. 2 “Est enim de ratione individui quod non possit in pluribus esse ss.”; *De subst. separ.* c. 5 “Materia autem corporalium rerum suscipit formam particulariter ss.”
- (24) 最近のこの種の研究としては、I. Klinger, *Das Prinzip der Individuation bei Thomas von Aquin* がある。
- (25) Roland-Gosselin, *op. cit.*, p 112.
- (26) Cf. *Summ. theol.* I, Q. 76, a. 3, obj. 4 et ad 4.
- (27) *Q. de spirit. creat.* a. 3.
- (28) 拙論「アヴィセンナの靈魂の概念」(中世思想研究 XI号, 1969), 82~84頁参照。
- (29) たとえば、アリストテレスでは靈魂形相は生命物体の原理であり、トマスの考えているように同時に物体の原理でもあるわけではない。またアリストテレスは理性の不滅も説くが、トマスでは人間において理性的、感覺的、栄養的、物体的原理の靈魂が不滅でなければならないことになる。
- (30) 拙論「アリストテレスの物体概念」(慶応義塾大学言語文化研究所紀要第5号, 1973), 89~94頁参照。
- (31) *De caelo* Γ8, 306b 16~.
- (32) *Phys.* Δ 4, 212a 21~ ; Δ 5, 212b 20.
- (33) *De gen. et corr.* A 10, 327b 23~ ; 328a 10; B7, 334 b13.

- (34) *De part. animat.* A 5, 645a 14~.
- (35) たとえば生命に独自の「種の保存」は個体の保持（栄養機能による）を越えている。個体は滅亡し、自己の一性を失っても、「自己に似たもの」を産出することによって種の一性保持に奉仕する。また「種の進化」は個体の発達（成長機能）を越えている。或る生物群は他の生物群の具える以上の機能を具える（たとえばアリストテレスによれば或る動物は運動器官がないが、高級な動物は運動器官とそれに必要な内官を具えている）。
- (36) 人間はたとえ知的機能（思考および意思）の結果として優劣の差はあっても、知性を具える存在としてはいささかの差別もない。
- (37) *Q. de anima*, a. 2, corpus et ad 5; a. 3, ad 21; a. 10, ad 3.
- (38) *Summ. theol.* I, Q. 76, a. 2, ad 1; *Q. de anima*, a. 6, ad 16; *Summ. theol.* I, Q. 79, a. 5; *Q. de anima*, a. 3.
- (39) *Phys.* A 9, 192a 22.